

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12491

研究課題名(和文) 明石における「地域の自画像」の研究 通史の変遷をたどる

研究課題名(英文) A Study of the Local People's Perceptions of Akashi, Japan: from the historical view

研究代表者

矢嶋 巖 (Yajima, Iwao)

神戸学院大学・人文学部・教授

研究者番号：80513845

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は兵庫県明石市を対象として、住民がその地域をどのように認識しているかを考察したものである。研究にあたってはフィールドワークや聞き取り調査に加え、文献学的な手法も併用し、住民意識の形成過程や通史の変遷に焦点を当てた。はじめに明石に関する資料収集とアーカイブの構築を行い、次いで「農村」「海との関わり」「現代における祭事」という観点から個別研究を行った。その結果、現代の「明石の自画像」は概ね江戸期に形成された地域的特色を基盤とするが、戦前期における郊外型都市としての発展、高度経済成長期における産業・生活の変化によって、こうした特色が徐々に変容を迫られてゆく過程が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「地域の自画像」は必ずしも固定したものではない。従来の研究では同時代的な「自画像」が注目されがちであったが、本研究ではむしろ、その歴史的推移に着目した。与えられた自然・社会条件のもとで、人々は意識的・無意識的な選択を重ねつつ、自己イメージを形成し、共有する。そのさまを明石という地域に即しつつ、具体的・通史的に検討することで、「物語としての歴史は、人間集団のなかでいかに形成され、何をきっかけに変化してゆくのか」という実像を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This study focused on Akashi in Hyogo Prefecture to examine local people's perceptions of the area. Along with fieldwork and interviews, the study adopted philological methods, focusing on the process through which local people's perceptions are formed and the way they change through time. Beginning by gathering materials on Akashi to build an archive, the study moved on to individual researches from the perspectives of 1) farming community, 2) relation to the sea, and 3) rituals at the shrine in the modern era. Based on the results, the following conclusion was drawn. Although the "self-portrait of Akashi" today is largely based on regional characteristics formed in the Edo period, it has gradually transformed influenced by the prewar development as a suburban city, and changing industries and evolving lifestyles in the postwar high economic growth.

研究分野：人文地理学

キーワード：明石 地域の自画像 データベース

1. 研究開始当初の背景

本研究は、兵庫県明石市を対象として、「住民が、その地域をどのように認識しているか」という問題（「地域の自画像」）を考察しようとしたものである。

従来、「地域の自画像」については、主に人類学や民俗学、地理学などによって研究が重ねられてきた。しかし、そこには問題点もあった。

先行研究の多くは、実地調査や聞き取りを主とする。そのため、どうしても同時代史が中心になりがちで、歴史的な推移がたどりづらい。また、従来の研究は「自画像」を生み出した歴史的原因（地域の特性・環境の変化、住民の意識・心性の変化）について、系統的な記述を欠きがちであった。単一の学問分野ではカバーしきれない要素が多かったためである。

本研究では、従来多かった同時代史的な「自画像」の分析ではなく、その通史的な変遷や形成過程に焦点を当てる。したがって、研究にあたっては、フィールドワークや聞き取り調査に加え、前近代の一次史料を用いた文献学的なアプローチも併用する。明石における「土地の記憶」を通史的・学際的に解明しようとする点に、本研究の特色がある。

2. 研究の目的

人は、自分たちの住んでいる場所をどのように認識しているのだろうか？ この問いに対して、人文科学的な立場から答えを出すことが、本研究の目的である。研究の対象となる地域は、兵庫県明石市（後述）である。

ある地域において、人間が生活を営み、共同体を形づくるとき、集団の内部では「自分たちの住んでいる土地のイメージ」が共有される。こうしたイメージは、地形や気候といった自然条件だけでなく、社会的・人文的な要素（産業、社会制度、習俗、文化など）が互いに影響しあって形成される。本研究では、それを「地域の自画像」と呼ぶことにしたい。

「地域の自画像」は必ずしも固定したものではない。自然環境や産業・社会制度、人々の意識は常に変化しており、それにとまって地域の自己イメージも少しずつ変わってゆく。従来の研究では同時代史的な「自画像」が目玉されがちであったが、本研究ではむしろ、その歴史的推移に着目する。与えられた自然・社会条件のもとで、人々は意識的・無意識的な選択を重ねつつ、自己イメージを形成し、共有する。そのさまを通史的に検討することで、「物語としての歴史は、人間集団のなかでいかに形成され、何をきっかけに変化してゆくのか」という実像が明らかになるであろう。

明石は、この点で好個の研究対象である。歴史的に多様な特性を持っており（農漁村、城下町、交通の要衝、工業都市、郊外型都市）、近隣都市からの影響も大きく、「自画像」に変化が起こりやすい。また、古典文学によって培われた歌枕のイメージが、いかにして「地域の自画像」に取り込まれ、捨てられてゆくか、という過程も興味深い問題である。文献史料に比較的恵まれており、歴史的なアプローチが可能であることも好条件の一つである。

3. 研究の方法

本研究では、まず1~2年目にアーカイブ構築を行う（下記）。その上で、3~4年目にアーカイブを利用した共同研究（下記）を実施する。さらに4年目の後半には、研究全体を総合し、一定の結論を導くものとする。

明石地域に関するアーカイブ構築

郷土史料、明石の登場する文学作品、地域住民への聞き取り調査結果、古地図、古写真、地域の現状に関する写真、祭事や民俗に関する写真・映像資料、藩政史料、町方・地方文書（近世）、近代史料、外国語資料などを収集し、テキスト化（翻字）を行い、全体に適切なタグ付けやデータベース化を施して、検索可能なアーカイブを構築する。

「農村」意識のめばえと名君信仰

江戸前期の明石藩は、積極的に治水・開墾に取り組んだ。地域の生産力は向上し、事業を推進した藩主・松平信之（1631-86）は、歿後、民間信仰の対象となるほどであった。こうした信仰は、農業を核とした「地域の自画像」と深く結びついており、現在でも信之に親近感を抱く地元住民は多い。信之の農業政策を分析するとともに、近世・近代を通じて、それが地域でどのように受け止められてきたか、文献史料・伝承の双方から複合的に検討する。

海と関わる「自画像」の形成・揺らぎ

明石の暮らしは海と深く関わってきた。江戸時代には漁業が基幹産業の一つであったし、近代に入ると、阪神地域の都市化にともない「明石の魚」がブランド化されていった。一方で、海岸浸食を理由に海岸を埋め立てた現在の明石では、海との接点が認識しづらい。こうした歴史のな

かで、海をめぐる「地域の自画像」がいかに形成され、また揺らいできたか、主に生活史のレベルで検討する。

現代における祭事と「地域の自画像」

明石市大蔵町の稲爪神社では、秋祭りの際に、地域住民の伝承してきた「獅子舞神楽」が奉納される。ベッドタウン化が著しく、明確な「地域の自画像」が薄れつつある現在の明石で、こうした民俗や伝統行事はいかなる意味を持つのか。稲爪神社を事例に、獅子舞そのものの歴史を明らかにしつつ、継承の現場における参与観察や、聞き取り調査の成果を生かして分析を行う。

4. 研究成果

明石地域に関するアーカイブ構築

当初計画よりも時間はかかったが、ほぼ期待通りのアーカイブ作成に成功した。またそのなかで特に重要と思われる資料については翻刻や注釈を行い、その成果を社会に還元した。なかでも明石最古の地誌とされながら従来本文調査や校訂が不十分なまま利用されてきた『采邑私記』の翻刻・訓読を上梓したことは重要な成果である。また、近世における明石地域の資料調査の実態についても検討を加えた。とくに、貞享2年(1685)に行なわれた、水戸彰考館による太山寺調査に注目し、『大日本史編纂記録』にもとづいて明石藩の協力があつたことを指摘した。この調査は、徳川光圀の命を受けて、佐々宗淳・丸山可澄らが実施した九州・中国・北陸の史料調査の一部であるが、元弘3年(1333)2月21日付「護良親王令旨」を始めとする古文書類が発見されたことが、『西行雑録』から判明する。また、『西行雑録』に抄写された兵法書『兵法四十二眼目五箇大事』(貞享当時、太山寺に伝来)の奥書によると、明石吉衛門真綱なる人物が天文9年(1540)6月19日に該書を太山寺に寄進したという。中世寺院と兵法との関係、あるいは太山寺に対する明石氏の信仰を考える上でも興味深い史実である。

写真資料に関しては、地域の人々や稲爪神社から古い写真を寄贈していただくとともに、その写真にまつわる記憶の収集を行った。また、それらの写真と、大蔵谷地域や稲爪神社の祭事を中心に撮りためてきた写真を整理し、アーカイブにした。

「農村」意識のめばえと名君信仰

明石地域における「農村」意識がどのように形成されたかを考察するために、「明石地域を流れる朝霧川の水害について歴史的経緯と地理的特色」「新田集落として開発された漆山下地区の歴史的経緯と地理的特色」について調査を行った。また補足的な研究として、地形図や空中写真も用いて朝霧川の水害や通勤通学流動を分析することによって明石地域に工業都市・田園郊外(昭和戦前期)住宅衛星都市(高度成長期)としての性格があつたことを明らかにしたほか、近代の明石における上下水道整備と伝染病の関わりを考察した。他方、文学作品及び史料類を活用して、明石藩主松平信之が領内の史跡や風景を文学的伝統・定型に基づいて理解していたかを明らかにした。以上を通して、近世以前から農村地帯としての性格を持っていた明石地域であるが、松平信之を中心とする新田開発事業の推進によってその範囲が拡大し、信之を象徴的な名君とする意識が生じたこと、信之が農業を中心とする藩政に強い関心を持ち、治者意識を抱いていたことなどが解明された。

海と関わる「自画像」の形成・揺らぎ

明石地域において海のとの関わりがいかに認識されてきたかを考察するために、「近世人が明石の海岸風景を題材にして制作した文学作品の分析」「瀬戸内各地のうどん出汁の比較に基づいた明石の海の食文化に関する地域性の確認」「新聞記事等を利用し、現代の明石市民が明石地域をどのように把握しているかを分析しつつ、教育演劇の試みとしてそれを戯曲化する」等の研究活動を行った。またこれらの研究成果を基盤としつつ、科学研究費分担者を中心とする公開シンポジウム「海のまほろば」を実施し、さらなる検討を行った。その結果、明石地域が古くから海上交通の要衝として重視され、生業・産業のひとつとして漁業が重視されてきた伝統があること、そのことが海に面する町としての「地域の自画像」を形成し、現在においてもなおその名残が強く見られること、一方で対岸である淡路島との交渉や水上交通による他地域との結びつきは戦後のある時期から薄れ、産業圏・生活圏・文化圏のとらえ方も変化しつつあることなどが解明された。

現代における祭事と「地域の自画像」

明石市大蔵地区における祭事と「地域の自画像」の関係を考察するために、「同地域の祭事を中心となっている稲爪神社の社記がどのように成立したのかの分析」「稲爪神社の祭礼や伝承をめぐる地域住民の意識の分析」「明石市大蔵地域に関する先行研究を整理し、主に交通面から地域特性を考察」「新聞記事等を利用し、現代の明石市民が明石地域をどのように把握しているかを分析しつつ、教育演劇の試みとしてそれを戯曲化する」「1940年代以降の社会変化を受け、稲爪神社の祭祀を担う地域集団がどのように変遷していったか」等の研究活動を行った。また本研究の実施期間はあたかもコロナ禍の時期と重なっており、こうした非常時において祭礼がどの

ように実施・継承されているかという点についても調査を行った。以上から、大蔵地域の祭礼は江戸時代に起源を持つものであるが、担い手である地域住民にとっては残されている文書資料よりもむしろ旧来のしきたりや伝承が重視されており、人々の「思い」が祭礼に新たな意味を付与していること、産業構造の変化により村社会が解体していくなかでも工夫を重ね持ちこたえてきたこと、そのような祭礼が伝承されることが地域の一体感やコミュニティ作りに繋がっている反面、高齢化や担い手不足といった問題も生じていることが解明された。

以上のように本研究は 4 年間に様々な研究成果を挙げ、明石に住む人々が明石をいかに認識しているかという問題を歴史的観点から明らかにした。これを概括すれば、農業、海との関わり、祭礼という三つの視点から考えた場合、現代における「明石の自画像」は概ね江戸期に形成された地域的特色を基盤として成立したものである。しかし、戦前期における郊外型都市としての発展、また高度経済成長期における産業・生活の激変によって、こうした特色は徐々に変容を迫られ、今や「地域の自画像」には少なからぬゆらぎが生じている。地域の人々のあいだには「地域の自画像」の喪失を嘆く声、あるいはそれを維持しようとする真摯な取り組みが見られ、今後、情報化社会の進展のなか、こうした問題がいかに推移してゆくか、さらに注視する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計22件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中村健史	4. 巻 43
2. 論文標題 松平信之資料稿	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 242-266
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢嶋巖・神戸学院大学人文学部人文学科環境・人類・地域・歴史科目群2021年度専攻演習（矢嶋ゼミ）履修生	4. 巻 2022
2. 論文標題 明石市大蔵地区における買い物環境と阪神・淡路大震災の記憶、防災の取り組み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 神戸学院大学人文学部人文地理学研究室2022年度研究報告	6. 最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢嶋巖	4. 巻 2022
2. 論文標題 中高教職課程の地理系講義において漆山新田や伊川谷掘割、有瀬の台地の地形について触れる意義	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 神戸学院大学人文学部人文地理学研究室2022年度研究報告	6. 最初と最後の頁 95-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢嶋巖	4. 巻 52-2
2. 論文標題 教職課程選択授業科目の講義で学ぶキャンパスと朝霧川の水害対策	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 環境技術	6. 最初と最後の頁 75-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢嶋巖	4. 巻 42
2. 論文標題 近代の明石と神戸における伝染病と水道・下水道	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸学院大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 103-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢嶋巖	4. 巻 1
2. 論文標題 写真映像を活用した大蔵地域との連携	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2021年度神戸学院大学地域研究センター活動・研究報告書	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村健史	4. 巻 45
2. 論文標題 細川幽斎の明石岡詠：『衆妙集』六四五番歌をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都大学国文学論叢	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村健史	4. 巻 42
2. 論文標題 播州明石浦柿本大夫祠堂碑銘訓釈	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸学院大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 181-196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村健史	4. 巻 1
2. 論文標題 野中清水浅酌：附梁田蛭巖野中清水酒詩序小箋	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2021年度神戸学院大学地域研究センター活動・研究報告書	6. 最初と最後の頁 (1)-(13)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山文・小原延之	4. 巻 1
2. 論文標題 人文学部における教育演劇の試み：「アタシノアカシ」を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2021年度神戸学院大学地域研究センター活動・研究報告書	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鹿島基彦・高田真・福原寿大・井上清太	4. 巻 1
2. 論文標題 明石のうどん出汁の地域性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2021年度神戸学院大学地域研究センター活動・研究報告書	6. 最初と最後の頁 17-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木遥	4. 巻 1
2. 論文標題 大蔵谷における南北方向の地域形成：交通、生業、土地所有の着眼点の整理	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2021年度神戸学院大学地域研究センター活動・研究報告書	6. 最初と最後の頁 43-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木遥	4. 巻 42
2. 論文標題 兵庫県明石市大蔵谷に関する先行研究レビュー：宿場町とその周辺とのつながりの理解に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸学院大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 123-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢嶋巖	4. 巻 47
2. 論文標題 都市中小河川朝霧川の災害リスクと水害対策 神戸学院大学有瀬キャンパス内の洪水調整池の貯留と廃止溜池の増水から考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間文化	6. 最初と最後の頁 17-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村健史・中村真理	4. 巻 47
2. 論文標題 『蛸壺塚』紹介と翻刻	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間文化	6. 最初と最後の頁 (1)-(10)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村健史	4. 巻 83
2. 論文標題 林鳳岡と明石八景詩 「赤石八景詩并序」注釈・続々	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究と資料	6. 最初と最後の頁 93-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村健史	4. 巻 41
2. 論文標題 藤井松平家紀功碑 翻刻と訓読 附故執政中大夫古河城主日向権守源公碑	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村健史	4. 巻 41
2. 論文標題 播磨国明石菅神廟記注釈	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 53 - 68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢嶋巖	4. 巻 2019
2. 論文標題 第二神明道路大蔵谷インターチェンジ付近における商業集積化 神戸市西区伊川谷町有瀬漆山下地区の地域変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 都市郊外地域における大学と地域との協働に関する研究研究成果報告書 < 地域研究センター都市郊外班 >	6. 最初と最後の頁 61 - 86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村健史	4. 巻 40
2. 論文標題 『稲妻大明神縁起』と『予章記』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 189 - 198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村健史	4. 巻 40
2. 論文標題 忠度塚碑小箋	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 181 - 188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村健史	4. 巻 82
2. 論文標題 人見竹洞と明石八景詩 「赤石八景詩并序」注釈・続	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究と資料	6. 最初と最後の頁 79 - 86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 中村健史
2. 発表標題 春の山田に山田に日はさして : 松平信之の治績と文事
3. 学会等名 第29回人文学会研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 三田牧
2. 発表標題 神社をめぐる地域共同体の変遷 : 明石市大蔵谷の事例から
3. 学会等名 第28回人文学会研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村健史
2. 発表標題 聞きしに似たる松風：歌語「明石の岡」と『源氏物語』
3. 学会等名 神戸学院大学人文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢嶋巖
2. 発表標題 通勤通学流動からみた昭和戦前期の明石周辺 予察的研究
3. 学会等名 神戸学院大学人文学会第25回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村健史
2. 発表標題 明石八景漢詩考 林家の文学、史学、経学
3. 学会等名 神戸学院大学人文学会第25回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢嶋巖
2. 発表標題 キャンパス内の溜池やグラウンドの洪水調整機能を題材とした地域系講義の展開
3. 学会等名 兵庫地理学協会2019年度春季例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村健史
2. 発表標題 『稲妻大明神縁起』と『予章記』
3. 学会等名 人文学会第22回研究発表会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 白方 佳果、中村 健史、三原 尚子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 136
3. 書名 いずみブックレット9 明石八景	

1. 著者名 西川哲矢・中村健史	4. 発行年 2022年
2. 出版社 デザインエッグ	5. 総ページ数 158
3. 書名 采邑私記 翻刻と訓読	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	寺嶋 秀明 (Terashima Hideaki) (10135098)	神戸学院大学・人文学部・教授 (34509)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中山 文 (Nakayama Fumi) (30217939)	神戸学院大学・人文学部・教授 (34509)	
研究分担者	鹿島 基彦 (Kashima Motohiko) (10443251)	神戸学院大学・人文学部・准教授 (34509)	
研究分担者	三田 牧 (Mita Maki) (50455234)	神戸学院大学・人文学部・准教授 (34509)	
研究分担者	中村 健史 (Nakamura Takeshi) (50753505)	神戸学院大学・人文学部・准教授 (34509)	
研究分担者	坂口 太郎 (Sakaguchi Taro) (50724142)	高野山大学・文学部・専任講師 (34701)	
研究分担者	鈴木 遥 (Suzuki Haruka) (40624234)	神戸学院大学・人文学部・講師 (34509)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関